

日本の伝統文化体験から得られる学習者の気づきと教師の役割
 Students' Cultural Awareness and the Teacher's Role during their Participation in
 Experiential Learning relating to Traditional Japanese Culture

森川結花, 甲南大学

永須実香, 上智大学

Yuka Morikawa, Konan University

Mika Nagasu, Sophia University

1. はじめに

本研究は、伝統文化の継承者と日本語教師とのコラボレーション授業のカリキュラム開発を前に、日本語学習者が伝統文化に触れることに学習上どのような意義と効果が認められるのか、また、伝統文化の専門家ではない日本語教師はどのような役割を果たせるのか検証することを目的としている。外国語学習において目標言語の文化についての学びも不可欠であることは、『外国語学習のスタンダードズ』（1999）の5Cの概念を引き合いに出すまでもなく、すでに共通認識となっている。しかし、**Cultural Products**（文化的所産・産物）を言語の授業の中でどう扱うか、そもそも扱うべきか否かという問題は、現場の状況によっても、また教師の見解によっても大きく左右され得る問題ではなかろうか。本研究では、その難しさ・扱いにくさの原因となっているところを明らかにするとともに、伝統文化体験学習の実践を通して見いだされた学習者の気づき、そして、日本語教師の役割について報告し、カリキュラム開発に向けての課題を示す。

なお、本研究では【伝統文化】を以下のように定義しておく。

【伝統文化】とは、現代よりも以前からその国にあって、それが良いもの・残しておくべきものと人々から認められて現代まで引き継がれてきた有形／無形の行動や思考のスタイル。日常生活に溶け込んでいるものから、今は「非日常」のものとなっているものまでである。

上の定義は、後述する留学生向け能楽ワークショップ後に集めた、留学生の振り返りシートの中の記述（*Even old things are still alive and vivid in Japan*）よりヒントを得たものである。本研究が取り上げる能楽等は現在の一般的な日本人から見て非日常性の高い伝統文化の産物であると考えられる。

2. 現状の問題点

本研究の発端は、甲南大学の卒業生である能楽師・上田宜照氏、茶道家・福田竹弍氏の国際交流への思いを筆者らが知ったことである。甲南大学には、欧米諸国の提携校から短期交換留学生を受け入れる **Year-In-Japan** プログラムがあり、そこに日本語学習者が能楽や茶道の生きた素材に直接接触れる機会を組み込めれば留学生にとってもプログラム全体にとっても有益だろうと思われた。

しかし、当プログラムではすでに複数の文化体験学習や研修旅行の機会を提供しており、その活動に対する評価が学習者によって大きく分かれることが分かっ

ていた。典型的な事例として 2018 年 2 月実施の「恵方巻体験」のフィードバックの結果を図 1 に示す（参加者 27 名中 24 名よりアンケート結果を回収）。

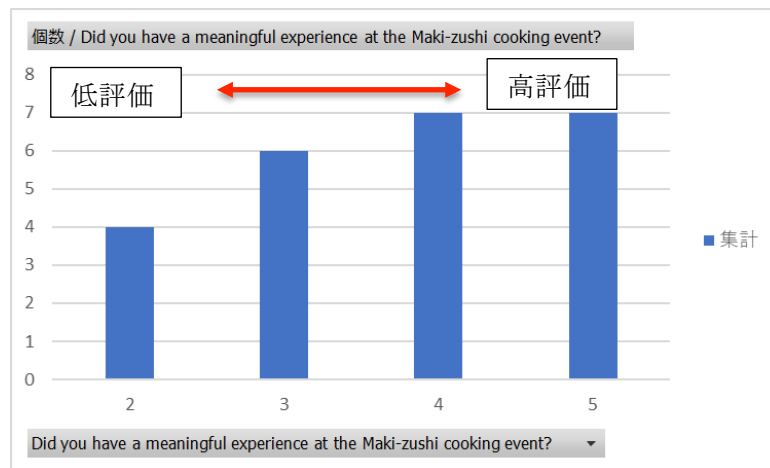


図 1 「恵方巻を作ろう」に関する学習者からの事後評価

実際の体験学習の場では全員が楽しそうに取り組んでいるように見えていたのだが、図 1 に現れているように、事後のフィードバックでは意義深かったという高評価とそうでもなかったという評価がほぼ半々である。これは当プログラムで行っている他の文化体験学習（紙芝居や書道など）でも同様のことが言える。

学習者からの反応がこのようになるのは、プログラム参加留学生の興味・関心の範囲が限定されているからではないだろうか。彼らは倉地(1992)がいう「ある文化を背景に、そこですでに自我の発達を確立させたごく普通の大人や、その途上にある青年期の人たち」であり、その大多数が日本文化の専門家を目指すようなタイプではない。日本語レベルも N4 から N2 の範囲に収まる「中級」学習者であり、日本語で日本事情の授業を受けられるレベルではない。また、彼らの日本語学習あるいは日本留学のきっかけは、マンガ、アニメ、J-POP、格闘技など現代文化であることがほとんどである（Dogen20190702 <https://youtu.be/WR-RZmos2o8>）。

以上の理由で、「ごく普通の青年たち」である学習者に文化体験学習活動をさせるか否か、継続するならどのように内容を改善すべきか、プログラムとして改革の必要が生じていたこともあり、新しいカリキュラム開発には慎重を期して取り組もうとしていたところであった。

3. 先行研究

外国語学習の中で扱うべき「文化」とは何をさすのだろうか。たとえば、川上(1997, 1999, 2002)や細川(1997, 2000, 2002, 2004)に代表される日本事情科目の中での文化についての論考や、Kubota(2003)、久保田(2008a, 2008b)に代表される批判的アプローチが対象とする「文化」とは、人々の行動や思考様式のような、言語生活の中に目に見えない形で溶け込んでいる概念のことである。本研究が対

象としているような伝統文化、つまり目に見える形で存在している文化（財）について云々する論考は管見の限りでは見当たらなかった。ただ、多くの先行研究から本研究は、「文化についての学びには特定の文化の押し付けになる危険性が含まれている」という重要な示唆を得た。

以上とは別に、個別的な文化体験学習の実践報告には枚挙にいとまがない。それらの中には歌舞伎や茶道などの実践報告もあるが、日本事情科目を受講できるような日本語能力レベルの高い学習者を対象としているものが多いのが特徴である。

4. 調査の方法

本研究は甲南大学 YIJ プログラムに参加する「ごく普通の青年」学習者を対象とした伝統文化体験学習のカリキュラム開発を目的としている。その準備段階として、①伝統文化の継承者が海外へ向けて伝えようとしている「思い」から日本語授業の素材としてふさわしい内容が引き出せるかどうか、②日本語教師は授業での伝統文化の扱いについてどのように認識しているか、③学習者は伝統文化体験学習活動を実際にやってみてどう思うのか、の3点について調査することにした。①についての報告は森川（2019）に譲り、②と③について詳述する。

②について、本研究は日本語教師向けに伝統文化についての講習会をシリーズで企画・実践し、参加者を対象としたアンケート調査を行った。

表1 日本語教師のための伝統文化講習会シリーズ

実施日	テーマ	講師	参加者人数
2018年8月25日	茶道	福田竹弼	12
2018年9月6日	能楽	上田宜照	9
2019年6月8日	現代短歌	なべとびすこ	16

これらとは別に、中立的な立場からの意見を集めるためオンラインでのアンケート調査も行っている。

また、③については、実験的に甲南大学で留学中の学習者を対象とした能楽ワークショップを日本語授業の一環として行い、参加した学習者、教師、日本人学生サポーターからのフィードバックを振り返りアンケートシートの形で回収した。

5. 日本語教師と伝統文化

この章では②についての調査結果を報告する。

オンラインアンケート調査で38人の日本語教師を対象に「日本語学習者は日本の伝統文化を知っていた方がいいと思いますか?」と質問し、回答として三つ

表2 日本語教師の伝統文化に対する意識調査結果

Q: 日本語学習者は日本の伝統文化を知っていた方がいいと思いますか?	人数 (%)
はい、必要がある・知っていた方がいいと思います	34 (89.5%)
いいえ、知る必要はない・知らなくてもいいと思います	0 (0%)
知っても知らなくても、どちらでもいいと思います	4 (10.5%)

の選択肢を与えたところ、表2のような結果が得られた(2019年8月28日現在)。

この結果からすると、日本語教師の大多数に学習者が日本の伝統文化を学ぶことに肯定的な認識があることがわかる。では、日本語教師は伝統文化を教えることができる機会を得たとして、実際にそれを実行に移すだろうか。例えば、現代短歌は、紙とペンだけで体験学習を実施できるが、果たして日本語教師はそれを実行するだろうか。この質問に対し、現代短歌ワークショップ実施後のアンケートで調査で、回答者13人のうち8名の教師が「ぜひ自分の授業でも短歌の創作をやってみたい」と前向きな姿勢を見せたのに対し、5名の教師は「やってみたいが無理だと思う」と消極的な考えを示した。その理由として2名の教師が「短歌の創作や講評に自信がない」ことをあげ、あとはそれぞれ「非常勤講師という立場上、自分でカリキュラムが組めない」「日本人学生の授業担当になってしまった」「時間的な余裕がない」という理由であった。このうち、「自信がない」という理由には本研究の筆者にも大いに共感できる。教師は、自分にはそのセンスがない／自分には教えられるスキルも知識もない／自分はその道の専門家ではないという理由で、チャレンジを避けることがあるのではないだろうか。

また、本研究の筆者の場合は、教師自身の内的な要因の他に「学習者の興味関心の向けどころや理解力に期待できない」という見込みが加わって、伝統文化の体験学習活動の実施を躊躇するに至っていたのである。

6. 留学生向け能楽ワークショップの実践

この章では③についての調査結果を報告する。

2019年2月8日、本研究は実験的に甲南プログラムの留学生を対象に本格的な伝統文化のワークショップを実践し学習者の反応を見てみることにした。ワークショップの内容は能楽、その講師は甲南大学文学部に在学中の観世流シテ方能楽師・寺澤拓海氏が担当した。

6.1 教材とカリキュラム案の作成

日本人にとっても非日常的なものに感じられるであろう能楽を、若い日本語学習者たちにも受け入れやすいものにするため、本研究の筆者は講師役の寺澤氏と事前に協議し、当日のカリキュラム内容と時間配分を表3のように組み立てた。

表3 能楽ワークショップの内容と時間配分

	場所	時間	内容
①準備授業	普通教室	30分間	能楽についての一般的な予備知識、冊子を読む
②ワークショップ	能楽歌舞伎練習場	50分間	i デモンストレーション：仕舞「熊坂」 ii ミニレクチャー：能楽の歴史 iii 能面の説明 iv 実技指導：立ち姿勢、すり足、能面 v 実技指導：謡「高砂」 vi 質問タイム
③ふりかえり	学生控室	10分間	ふりかえりシートに記入

対象となる学習者は初級7名、初中級9名、中級13名、上級9名の計38名、それをAグループ：初級+上級、Bグループ：初中級+中級の二つのグループに分け時間をずらして実施し、Aグループでは日本語がおぼつかない初級者のため

に上級者が通訳（／翻訳）の役割を果たす、Bグループは通訳なしで自力で講師の日本語を理解するよう努力させることにした。

また準備授業で使用するブックレット型教材を作成するため、筆者が寺澤氏にインタビューを試み、学習者に向けて講師が伝えたいことや、デモンストレーションの演目である「熊坂」の見どころなどを聞き出した。ブックレットには講師自身に自己紹介文と留学生に向けてのメッセージを書いてもらい、そのままの形で使用した。講師の自己紹介文は次の通りであった。

****年*月*日生、大阪府出身

甲南小、中、高校を卒業し、現在甲南大学文学部歴史文化学科に在学

好きな食べ物…たこ焼き

趣味…読書とマンガ

ワンピースとキングダム 面白いので読んでみてください！

いつか行ってみたい所…フランスのモンサンミッシェル

この程度の難易度ならば初級者でさえたやすく理解でき、かつ学習者世代にとって身近な話題（食べ物やマンガなど）が含まれているので一気に親近感がわいたようであった。しかし、以下のメッセージの方は初級者にはまったく歯の立たない難易度のものであった。

留学生の皆さんへ

私は現在甲南大学に通っている一回生です！

皆さんは日本に大変興味を持ち、留学されていると聞いております！日本には伝統的な文化や芸能が沢山あり、留学中にたくさん目にする事と思います。私は日本という国の能楽師の家にたまたま生まれ、能楽に携っているわけですが、凄く光栄だと思っています。私には能楽を通して、少しでも多くの世界中の文化に触れ、発信していきたいという目標があります。皆さんが帰国された時、自国の素晴らしさを改めて感じられる事と思います。多くの日本に触れ、持ち帰って頂き、引出の一つになれば幸いです！

今日は是非楽しんで能楽に触れてみてください！ (原文ママ)

このメッセージの読解にあたっては上級者が内容を英語に通訳して初級者に伝えるという形で情報を共有するという方法をとった。

また、講師から学習者に最も伝えたいことを尋ねたところ、「能は舞台上の演者と観客が一体となって作り上げるもので、観客が受け身の姿勢で見ているのは何にも分からないんです。この演目（熊坂）では、熊坂は一人で舞っているのではなく、姿の見えない牛若丸と戦っているのです。観客は想像力を使って牛若丸の姿

を見てほしいんです」（寺澤氏談の要約）ということであった。そこで、筆者は事前授業で「熊坂」のあらすじを学習者に伝えると同時に、鑑賞のポイントとして聴衆が積極的に想像力を働かせることの重要性を強調するために、【心の目で牛若丸を見てください】という一文を示した。

6.2 学習者の反応

ワークショップ中の学習者たちは最初のデモンストレーションの厳粛な雰囲気ですっかり飲み込まれたのか、普段見せたことのない熱心さで体験学習活動に取り組んでいた。Aグループは上級者が講師の日本語を通訳するという形で初級者へのサポートをしたが、Bグループは通訳は一切なしで、講師の語る生の日本語を学習者が直接理解するしかなかった。が、学習者はその場の空気まで読もうとするかのように熱心にワークショップに没入していた。そのBグループの最後の質問タイムの時に、教師に促されてやっとの思いで学習者の一人が出したのが「何歳から始めましたか？」というシンプルな質問だった。それに対する「2歳の時からです」という講師のたった一言に、学習者一同が「おお！」と感動の声をあげたのが印象的であった。自分たちの言葉で自力で収集した情報の内容に大きな感動を覚えたのであろう。

ワークショップ後の振り返りの時は、学習者から率直な感想を引き出すために教師はあえて退き、日本人サポーター学生にリーダーとなって場を仕切らせた。その報告によると、学習者たちの興奮はしばらく続き、ポーズの真似をするなどして能楽の話題で話が弾んでいたということであった。

6.3 振り返りアンケート調査の結果と考察

参加者38名中25名から回収できた振り返りアンケート調査の結果を見ておきたい。全体としてこの能楽体験ワークショップが意義深いものであったか？／楽しかったか？と尋ねたところ、回答は高評価に偏った（図2参照）。

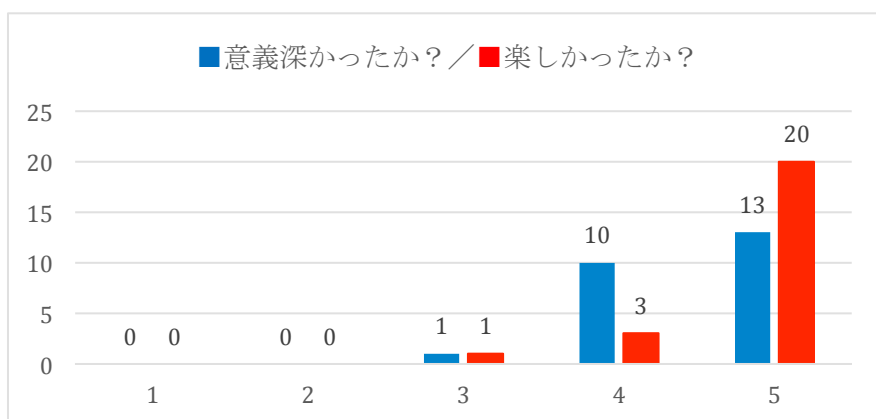


図2 ワorkshop振り返りアンケート調査結果

このワークショップで初めて学んだことは何だったかという問いに関しては、能楽そのものが初めての体験であったという学習者が多かったこともあり、回答は以下のように多岐にわたっていた（表4参照）。

表4 能楽WSで初めて学んだことは？（複数回答可）

能の歴史／謡／身体の動き	各 19	伝統文化	11
能面／声	各 17	衣装	10
能楽の鑑賞の仕方	14	想像力／継承者の存在	各 8
仕舞	13		

最後に一番感動したことについての回答を内容でまとめて分類してみた。最も多かった回答内容は「現場に参加でき、体験を共にできた」ということであり、芸術性や技芸に注目している回答は少なかった。また、数は少ないが、講師がごく幼少期より芸事の道に献身したことに感動を覚えたという声があった。これは「何歳の時に始めましたか？」という学習者からの質問に関連しているものと思われるが、学習者と同世代の若者である講師に親近感を覚え、その生き方に心を動かされたということであろう（表5参照）。

表5 能楽WSで一番感動したことは？

現場に参加できたこと	能楽の技芸の素晴らしさ	講師の人生の選択
<ul style="list-style-type: none"> ・実際に能を見たこと (14) ・謡を一緒に歌った (5) ・ Even old things are still alive and vivid in Japan ・ Really getting to hands on try it. My University offers an extensive Noh class but nothing so interactive. 	<ul style="list-style-type: none"> ・動き ・跳躍 (力) ・声量 	<ul style="list-style-type: none"> ・ It was very impressive to see how he has dedicated his entire life to Noh and it was very fun and interesting to watch him perform. ・ 一番感動したことは寺澤さんの献身です

以上の結果をまとめると、このWSに参加した学習者の多くが感動していたのは、伝統文化の継承者である講師と現場を共有し、わが身をもって生きたオーセンティックな人と芸に触れ、伝統の継承に身を捧げている個人がいることを発見していたということであろう。学習者自身の記述によれば、遠い非日常的な世界のものだと思っていた古い物が、今・ここに、生き生きと息づいていること（Even old things are still alive and vivid in Japan）、そして、学習者と同世代の若者が文化の継承のために身を捧げている（It was very impressive to see how he has dedicated his entire life to Noh / 一番感動したことは寺澤さんの献身です）ことを発見したのである。これは決して能楽の芸術性や文化的な価値の発見ではないが、学習者たちなりに等身大の捉え方をしているといえるだろう。

これらのことを学習者たちの日本語レベルに照らし合わせて考えてみよう。彼らの大多数はOPIでいうIntermediateレベルかその近辺のプロフィシエンシーを持つ日本語話者である。Intermediateレベルの話者にできることは、「実際に体験したことを伝える、あるいは、身近に存在する個人に関心を持ち、かかわりを

持つ」であり、この学習者たちのWSでの気づきはちょうど彼らのプロフィエンスレベルに相応するものなのではないかと思われる。そうであるならば、将来、彼らの日本語能力レベルが上級、超級と高まるにつれ、気づきの内容も変わってくるのではないだろうか。

ちなみに、この学習者たちの「先輩」で上級・超級にまで育ちあがった学習者数名に本研究の筆者が聞き合わせてみたところ、2019年夏の期間に専門家として短期集中留学プログラムに参加していた超級レベルの学習者（米国大学院に在学中の中国語母語話者）から次のようなコメントを得た。

日本の文化は奥が深いです。日本語のレベルによって（分かることが）違うと思いますね。私もI大学の時に日本館で茶道をやりましたが、あれは簡単なことでした。今回はもっと深いところまでわかりました。真行草とか。

この意見が正しいとすれば、学習者の日本語能力の上達・成長を大きなスパンで考え、学習者なりのレベルに応じた捉え方を認めると同時に、早い段階からでもいろいろな文化体験をさせて言語能力と同時に文化能力も積みあがっていくようなカリキュラムをデザインしておく必要があると結論づけられよう。

7. 体験学習活動における日本語教師の立ち位置と役割

最後に、体験学習活動において、日本語教師は何ができるのかということについて言及しておきたい。

本研究が実験的に行った能楽ワークショップにおいて、伝統文化の継承者、日本語学習者、日本語教師は以下の図3のような位置関係にあった。

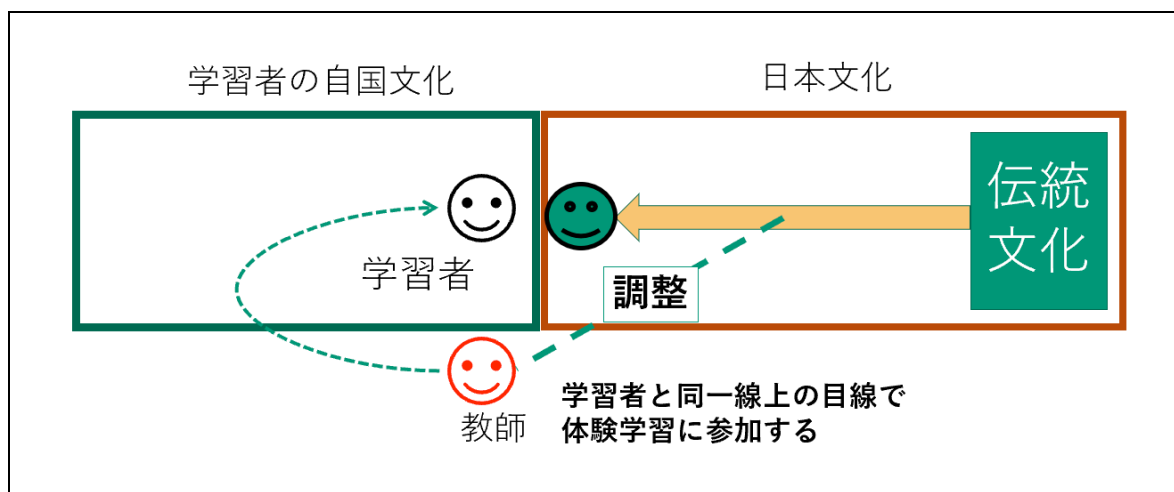


図3 能楽ワークショップにおける参加者の位置関係

一般的には、伝統文化は普通の人々の生活からかけ離れたところにあるようなイメージのものであろう。その世界の継承者である寺澤氏には学習者のそばまで近づいてもらう必要があるので、教師（本研究の筆者）は事前準備の段階で寺澤氏からプロフィールを聞くなど情報を集め教材を作成した。また、教師は学習者に

分かることばで事前授業で予備知識を与え、寺澤氏の前に押し出した。なお、教師自身も能楽になじみがなく、伝統文化までの距離感において教師も学習者も同一線上にある。そのため、ワークショップ時には教師は日本の伝統文化に関してはアマチュアであることを自覚して学習者と同じ目線で体験学習活動に取り組んだ。そのような位置関係を図3は表している。長谷川(1999)は「権威者による知識の伝授よりも、学習者に直接日本という異文化に触れさせ、学習者が自ら日本人・社会と相互作用を持つ中で、自らの目で確かめた日本文化を自らの知識・体系として構築していく。それこそが真の学習」と述べているが、この図はそれを具体的に表した関係図になっていると言えよう。

また、ここで、教師からの働きかけの線が学習者へはさりげなく回り込むような線になっているのに対して、教師から文化の継承者への調整の方の線は太目に描かれていることの意味を述べておきたい。

本研究は、教師は調整の役割に関してはしっかりやっておく必要があると考えている。なぜならば、日本語教師ではない日本語母語話者の場合、日本語学習者の日本語力への配慮よりも「外国人に伝えたい」という思いが先行しすぎて特定の情報の「押し付け」につながる危険性を孕むからである。この辺りの調整は学習者の日本語レベルや、情報理解の許容量や関心の向け方を熟知している日本語教師が「何をどのようにすれば伝わりやすいか」を考えていく必要があるだろう。

その調整をした後で行った能楽ワークショップでは、教師も参加者の一人として学習者と体験を共にしていたわけであるが、その場では教師は従来の「教える役割」のイメージを手放していた。このことに関しては是非も含め、まだまだ議論の余地のあるところかもしれない。しかし、「教える」役割を手放す選択肢ができることで、教師にとって「なじみが薄い」「自信がない」分野にもテーマを広げられる。これは学習者にとってもメリットとなるだろう。

8. まとめと今後の課題

本研究が実験的に行った伝統文化の体験学習活動についての考察から、日本語学習者は現実に日本の文化に接触しておのおの日本語能力レベル相応の受け止め方をし、それを積み重ねていくことで文化への理解を深めていくらしいということが見えてきた。一人の学習者が初級、中級、上級、超級と上達のスパイラルを登っていく過程の中で、その体験を何度も繰り返していくのであれば、その途上に「体験学習」の機会が設けられていることには意義のあることであり、カリキュラムの中に組み込んでおくことは推奨されるべきであると結論付けられそうである。また、それが非日常的／芸術的／伝統的／歴史的な要素が強見え、日本語教師の専門外で扱いきれない分野のものであったとしても、教師はそこで学習者とオーセンティックな生きた素材（文化の継承者）を引き合わせる「黒子」として調整者の役割を果たしていかなければならない。

本研究の結論は以上であるが、今後はさらに個別の、能楽なら能楽、茶道なら茶道というふうに、それならではの体験内容の検討をし、学習者に伝える仕掛けを考えてみたいと考えている。

伝統文化の継承者は常に過去に向き合い、過去に生きた先人の姿や思いを現在に生きる私たちの前に生き生きと表現することを生業としている。その彼らが真に伝えたいことが国、民族、歴史、言語、世代の違いを超えて日本語学習者に届くようにするために、また学習者が受け止められるようにするために私たち日本語教師には何ができるだろうか。今後も研究を続けていきたい。

参考文献

- 長谷川恒雄(1999)「日本事情—その歴史的展開—」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』1, 4-15 くろしお出版
- 細川英雄(1997)「言語習得における<文化>の意味について」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』9, 1-19 早稲田大学日本語教育研究センター
- 細川英雄(2000)「崩壊する「日本事情」—ことばと文化の統合をめざして—」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』2, 16-27 くろしお出版
- 細川英雄(2002)「ことば・文化・教育—ことばと文化を結ぶ日本語教育をめざして」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』1-10 凡人社
- 細川英雄(2003)「「個の文化」再論—日本語教育における言語文化教育の意味と課題—」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』5, 36-51 くろしお出版
- 川上郁雄(1997)「日本文化を書く—日本事情」を通じてどのような力を育成するか」『宮城教育大学紀要』32, 1-16 宮城教育大学
- 川上郁雄(1999)「「日本事情」教育における文化の問題」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』1, 16-26 くろしお出版
- 川上郁雄(2002)「言語と文化の教育そして日本事情」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』4, 126-132 くろしお出版
- 久保田竜子(2008a)「ことばと文化の標準化についての一考」佐藤慎司・ドーア根理子編『文化、ことば、教育—日本語／日本の教育の「標準」を越えて』14-30 明石書店
- 久保田竜子(2008b)「日本文化を批判的に教える」佐藤慎司・ドーア根理子編『文化、ことば、教育—日本語／日本の教育の「標準」を越えて』151-173 明石書店
- 倉地暁美(1992)『対話からの異文化理解』勁草書房
- 森川結花(2019)「日本語教育における伝統文化をテーマとした異文化理解プログラム開発の可能性」『甲南大学教育学習支援センター紀要』4, 53-64 甲南大学教育学習支援センター
- National Standards in Foreign Language Education Project (1999). *Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century*, American Council on the Teaching of Foreign Languages.
- Kubota, R (2003). Critical teaching of Japanese culture. *Japanese Language and Literature*, 37, 67-87